

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月5日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520583

 研究課題名（和文）言語越境者が自己評価する能力の考察
 —母語話者基準に限定されない能力認知のために—

 研究課題名（英文）On Linguistic Capital Recognition Among Plurilinguals: Creating
 Language Portrait Activity Devices For Japanese University
 Students

 研究代表者 姫田 麻利子 (HIMETA MARIKO)
 大東文化大学・外国語学部・准教授
 研究者番号：50318698

研究成果の概要（和文）：

言語越境者は、自分の言語資本の各要素についてコミュニケーション場面ごと異なる価値を意識すると同時に、それら言語資本全体に固有の価値づけをしている。複言語能力とは、コミュニケーション場面ごとのアイデンティティ戦略上の利益を予測し、言語資本の中から部分を選び、組み合わせる、時に隠す能力である。大学生の複言語能力育成に向け、既習言語それぞれについて自分にとっての価値を意識化させる教材を工夫した。

概要（英文）：

A plurilingual is conscious of the value of each element of his/her linguistic capital. This value changes within each communication scene, but at the same time the plurilingual is conducting an evaluation process that regards his/her entire linguistic capital. Predicting and judging the advantages to his/her identity start in a particular communication scene order, he/she can choose, combine or sometimes hide portions of his/her linguistic capital. In order to contribute to the training of plurilingual competence, we are devising teaching materials through which a college student might become more aware of value for and by themselves, in the studied languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ポートフォリオ、複言語、複文化、CEFR

1. 研究開始当初の背景

(1) 欧州評議会の提唱する「複言語主義 (Plurilinguisme)」は、2001年の『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠(以下CEFR)』により、日本でも用語として普及した。とはいえ、日本の外国語教育研

究分野における複言語複文化主義的イニシアティブは、同一大学に科目のある複数言語間で CEFR の具体的能力記述を共有する提案や実践、単一言語内の能力不均衡を認知する方向性にとどまっている。

(2) CEFRについては、外国語学習／教育のめざす能力を、基礎段階 A1 から熟達段階 C2 まで 6 レベルごと例示的に記述した評価基準表に関心が集中した。CEFR は冒頭で、新しい理念である複言語主義とは、単に一つか二つの言語を学習し、それを相互に無関係のままにして、究極目標としては理想的母語話者を考えるものではないと主張したが、目標言語社会のネイティブ基準に限定されない複言語・複文化能力の定義は具体的には示さなかった。CEFR には、蓄積された研究成果にもとづき、異なる環境で外国語教育にたずさわる者同士の共通理解を見込まれた具体性と、これから各環境で考察と工夫の積み重ねが期待される抽象的選択肢が混在している。

(3) CEFR 開発のための欧州評議会現代語部の研究を遡れば、複言語主義は、言語・文化越境経験者が学校教育に限らず人生の過程で獲得した間言語・間文化能力および仲介能力を、ネイティブ基準からすると部分的だったとしても積極的に認知しようという主張だったはずである。

(4) CEFR はそもそも、90 年代の見聞集積にもかかわらず、社会構成主義的視野から認知提案された能力を採用していない。とはいえ、CEFR と同時提案された個人用教材『言語ポートフォリオ』には、「言語バイオグラフィ」ページが設けられ、社会構成主義的視野の発展が待たれていることがわかる。CEFR 以降、狭義にとどまらない「複言語主義」において認知すべき能力は何か、既存概念の再定義や新概念の模索と同時に、CEFR 提案に限定されない能力の自己評価を促す「言語バイオグラフィ」の工夫が考察されている。その推進に、欧州に限らない地域からの視点が求められている。

2. 研究の目的

(1) 複言語使用におけるアイデンティティ戦略の重要性確認：

複言語・複文化主義における能力定義において重要なのは、ネイティブ行為者を理想とする基準で測れば不完全で限られた能力に対する積極的評価という側面だけでなく、限られた能力群の寄せ集めレポートから、コミュニケーション状況しだいで、自分に持たせたい属性、価値に照らして有効な一部を取り出し運用するという側面への着目だと考える。複言語・複文化能力がこのように個人のアイデンティティ戦略を含む以上、教師や権威機関があらかじめそれを具体的到達目標に翻訳することはできない。言語・文化越境者個人の自己評価により初めて明示的になるが、言語・文化越境者の言語習得形態と仲介体験は多様であり、学習者がめざす経路

は見えにくい。

(2) 複言語複文化経験により作られる主観的意味世界分析の指標策定：

複言語使用者、複数文化経験者、言語・文化越境者に対するライフストーリー調査に基づき、帰納法的に、間言語・間文化的能力、言語・文化間仲介者能力を定義し、その指標的キーワード集を作成すること、

(3) 複言語複文化能力育成のための教材開発：(2)に基づき、あらかじめ与えられるネイティブ話者基準による評価に慣れた学習者に、部分的能力の発動とアイデンティティ戦略の関係を意識化するための教材を作成すること、

以上(2)、(3)を本研究の目的とする。

3. 研究の方法

(1) 先行研究レビュー：

「複言語主義」の視野を共有する研究の中から、個人の言語・文化経験の主観的評価の方法論に関する先行研究、およびライフストーリー・インタビュー方法論と「欧州言語ポートフォリオ」内「言語バイオグラフィ」機能の理論的關係づけに関する先行研究レビューを行なう：

Coste, D. *et al.* (1997), *Compétence plurilingue et pluriculturelle*, Editions du Conseil de l' Europe, 70p ; Alao, G. *et al.* (2010), *Implicites, stéréotypes, imaginaires*, Editions des archives contemporaines, 201p ; Molinié, M. (2009), *Le dessin réflexif*, CRTF, Université de Cergy-Pontoise, 180p ; Zarate, G. *et al.* (dir.) (2008), *Précis du plurilinguisme et du pluriculturalisme*, Editions des archives contemporaines, 440p ; Moore, D. & Castellotti, V. (2008), *La compétence plurilingue : regards francophones*, Peter Lang, 250p ; Molinié, M. (coord.) (2006), *Biographie langagière et apprentissage plurilingue, FDM, Recherches et Application*, 189p ; Cain, A. & Zarate, G. (2006), *L'entretien : ses apports à la didactique des langues*, Le Manuscrit, 246p ; Molinié, M. & Bishop, M.-F. (2006), *Autobiographie et réflexivité*, CRTF, Université de Cergy-Pontoise, 162p. etc.

(2) ライフストーリーインタビュー調査：

日常的に日仏言語文化境界にいて、言語と文化価値観のスイッチ、混合使用を行っている人を対象に、言語習得形態や複言語使用、複文化運用の体験を軸にライフストーリーの聞き取りを行い、複言語話者のアイデンティティ戦略を類型化し、その構成要素を抽出す

る。

(3) 教材開発：

そこで得られた概念を、学習者がポートフォリオ上で行う部分的能力の発動とアイデンティティ戦略の関係を意識化のための教材に工夫し、導入実験を行なう。

4. 研究成果

(1) 複言語使用におけるアイデンティティ戦略の重要性確認：

まず、CEFR 推敲の過程で、複言語・複文化主義の理念とコミュニケーション能力概念を関係づけるために欧州評議会から発表された Coste, D. *et al.* (1997), *Compétence plurilingue et pluriculturelle* の翻訳を、CEFR がコンセンサスを急ぐ目的で、今後の各文脈での考察深化を待ち採用しなかった部分を含め行ない、日本で「複言語・複文化能力」に関する議論を進める基礎とすべく、欧州評議会文献サイトで公表した。とくに以下の点が重要だと考えた。

① 複言語主義における外国語教育が目指すのは、二言語以上等しく熟練していることではない。

② 複言語話者は、相手しだい、状況しだいで、アイデンティティ戦略にしたがって、所有する言語文化資本から部分を選び、組み合わせたり、別の部分にスイッチしながら、コミュニケーション方法を調整する。

③ そのアイデンティティ戦略は、個人の経験により作られる自分の言語文化資本イメージにより決定される。相手・状況にどんな言語文化資本イメージが働いているかのイメージを含む。

④ そのイメージは経験により更新される。

⑤ 複言語主義における外国語教育が目指すのは、固有の言語文化アイデンティティである。

(2) 方法論比較

言語文化イメージは、これまで外国語教育研究の対象であったが、そこではあらかじめ学習の成功とは何か規定され、それに基づき有効な成功要因イメージが提案された。しかし、「複言語・複文化能力」は、個々人の経験により作られる主観的意味世界を尊重する概念で、成功は、アイデンティティ戦略の結果得られる利益であり、それを規定するのも各個人である。

経験と主観的意味世界を分析する方法として、先行研究が対象にしているのは、主にライフストーリーインタビューで、他には「移動する」作家の作品、ディスコース、学習日記、フォーラム上のコメント、手紙だった。ライフストーリーインタビューは、人生の経験の主観的な意味を、既存のカテゴリー

にあてはめることなく、新しいカテゴリーの発見や創出により、みちびくのに適した方法であると言える。

(3) 複言語使用者に共通する事項抽出：

日本でのインタビュー 2 件（日本でフランス語を学ぶ中国出身大学生、日本・フランス・韓国の移動経験のある在日韓国人）フランス語圏（カナダ・ケベック州）在住者へのインタビュー 2 件（フランス語入門レベルのカナダ政府機関所属研究者、ブルキナファソからケベック移動経験者）を実施した。インタビューの結果から以下を明らかにした。

① 複言語使用者は、L1, L2（英語、日本語、韓国語）、L3 の言語能力を、母語話者基準に照らして比較することはあるが、その比較において下位にある L3 の能力に関してネガティブな表現は用いない。母語話者の運用に届かない言語・文化使用が、コミュニケーション上、不利とならなかつた経験、あるいはかえって有利に働いた経験をむしろ評価している。それらの経験により、能力不足よりも、その職業的価値、親密な関係構築のための価値が意識化されている。彼らはその価値の意識化により、言語・文化越境機会を増やし行動領域を広げるが、その行動領域拡張は、家族や周囲で共有される「社会的上昇」イメージを追わない。実際の言語越境者たちは、母語話者基準や一般的外国語使用価値から独立し、個人的な言語・文化の価値を優先した結果、個人的な言語越境領域を開拓する。

② 言語資本の獲得方法は、次のように分類でき、資本を増やす過程で別の方法への移行が見られる。

- 家族からの相続
- 学校教科
- 学校外教育機関
- 外国滞在経験
- 人との出会い
- メディア接触

③ 現在の使用における価値は第 1 の資本獲得方法と関係ない。

④ 価値は大きく分けて職業上の価値と親密な感情の価値（配偶者の言語、家族の思い出の言語、仕事を離れた友人との付き合いの言語等）がある。

⑤ 職業的価値を持つ言語資本はどこかの段階で資格の為に学校制度を通過していること、親密な感情の価値を持つ言語は、家族文脈、外国体験、人との出会いを経ている。

⑥ 価値は経験の中で変動していく。

⑦ 周囲の価値観への適応目的で自分の言語文化資本の一部の価値を否認する段階を経て、一般的な価値観から独立した固有の価値が見出される。

⑧ ⑦の結果として、周辺人としてのアイデンティティに読み変えることに成功している。

これらの点については、日本社会においても実際の複言語使用者間では広く、共有される経験であり、暗黙に共通理解があるが、外国語教育に導入されていない視野であり、また伝統的に同じ価値観の共有を目的とする学校教育では導入しにくい視野であるため、複言語使用者もそれを明示することは稀であることが、学会発表等意見交換の場で明らかとなった。

(4) 言語ポートレート開発：

(3)の調査結果を踏まえ、日本人大学生の複言語文化資本の発展的運用、すなわち外国語外国文化能力運用の積極性を高めるために、母語話者基準に照らした学習とは別に、自分との関わりによって既習複数言語の価値を相対化し、その固有の価値化と固有の言語文化アイデンティティの意識化を促す教材の開発・工夫が有効だと考えられる。

大学の外国語教室では、能力自己評価や将来の能力活用イメージ、また言語選択理由の調査がしばしば行われているが、全ての既習言語を同時に対象とし、自分との関わりから相対化して表現する活動は行なわれていない。外国語運用の積極性を高めることにつながる複数言語文化資本に対する固有の価値化、固有の言語文化アイデンティティ意識化の教材を工夫する出発点として、欧州の移民の子供向け言語ポートレートの有効性を検討し、日本の大学生に対し導入実験を行なった。

言語ポートレート活動では、既習言語と自分の関わりを絵として表現する活動時間の中で、ふり返りが行なわれ、絵を他者に向けて説明する言語表現の中でもさらにふり返りが行なわれることで、固有のアイデンティティの意識化につながる有効性が確認された。

実験結果分析により、大学生においては既習外国語の価値が「学習」概念から離れ難いこと、将来の価値について職業的価値、親密な感情の価値どちらも具体性が表現されないこと、社会文化要素が伴わないことが明らかになった。

大学生の外国語学習への言語ポートレートの導入について、日本および欧州の研究者から関心が寄せられた。

今後は、独立した価値への意識化をさらに導くことのできる工夫を今後進めると同時に、複数の言語越境をすでに経験している欧州の大学生による言語ポートレートとの比較分析を行なう予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

① Himeta, Mariko, 《Portrait des langues des étudiants japonais》, 『語学教育研究論叢』(大東文化大学語学教育研究所) 査読あり, 第30号, pp. 213-232, 2013年3月.

② Himeta, Mariko, 《Observation de la culture cible : première étape d'une prise de conscience interculturelle》, in Alao, G. et al. (dir.), *Didactique plurilingue et pluriculturelle : l'acteur en contexte mondialisé* (ISBN 9782813001092), 査読あり, Paris : Éditions des archives contemporaines, pp.143-152, 2012年12月.

③ 姫田麻利子, 「複言語・複文化経験とアイデンティティ」, 『語学教育研究論叢』(大東文化大学語学教育研究所) 査読あり, 第29号, pp. 243-264, 2012年3月.

④ 姫田麻利子, 翻訳: 「複言語話者のバイオグラフィ」(Zarate, G. 《Annexes》, *Compétence plurilingue et pluriculturelle*, Conseil de l'Europe, 2009), 『大東文化大学紀要』人文科学, 査読なし, 第50号, pp. 181-194, 2012年3月.

⑤ 姫田麻利子, 翻訳: 「複言語複文化能力とは何か」(Coste, D. et al., *Compétence plurilingue et pluriculturelle*, Conseil de l'Europe, 1997), 『大東文化大学紀要』人文科学, 査読なし, 第49号, pp. 249-268, 2011年3月.

〔学会発表〕(計4件)

① Himeta, Mariko, 《Portrait des langues d'étudiants japonais》, Politiques linguistiques, représentations sociales et trajectoires multilingues, PLIDAM&SOAS, 2013年2月15日~16日(イギリス・ロンドン大学).

② 姫田麻利子, 「CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)と複言語・複文化能力」, 東北大学高等教育開発推進センター・国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点提供プログラム「外国語教育の指導力を育成する」, 2012年7月28日(東北大学).

③ 姫田麻利子, 「複言語・複文化経験とアイデンティティ」, 北海道大学情報基盤センター共同研究公開研究会「CEFR: 複言語・複文化と英語教育・フランス語教育」, 2012年6月23日(北海道大学).

④ 姫田麻利子, 「学習の意識化とポートフォリオについて」, 信州大学全学教育機構言語教育センター・2010年度言語教育センター・フォーラム, 2011年3月17日(信州大学)。

〔その他〕

ホームページ等:

翻訳「複言語複文化能力とは何か」「複言語話者のバイオグラフィ」については、欧州評議会サイト言語教育・言語政策ページでも公開。

http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/SourcePublications/CompetencePlurilingue97_jap.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

姫田 麻利子 (HIMETA MARIKO)

大東文化大学・外国語学部・准教授

研究者番号: 50318698